

子供はばかでなかった

小川未明

青空文庫

吉雄は、学校の成績がよかつたなら、親たちは、どんなにしても、中学校へ入れてやろうと思つていましたが、それは、あきらめなければなりませんでした。

「なにも、学校へいったら、みんなが偉くなるというのでない。りっぱな商人には、小僧から成り上がるものが多いのだよ。家においては、なんのためにもならぬから、いいところをさがして、奉公なさい。そして、お友だちに、まけないようにしなければならぬ。」と、お母さんは、いいました。

いままで、小学校時代に、仲よく遊んだ友だちが、それぞれ上の学校へゆくのをみると、うらやましく、お母さんには思われました。

「なぜ、うちの子は、もうすこし勉強をして、できてくれぬだろう？」

こう思う一方には、また、できない我が子が不憫になつて、

「あの子の心のうちこそ、いつそう、悲しいだろう。」と、考えて、なにもいうことはできなかつたのです。

町の、大きな呉服屋で、小僧が入り用だということを聞いたので、そこへ、吉雄をやることにしました。

「よく、ご主人のいいつけを守って、辛棒するのだよ。」と、お母さんは、いぎゆくというときに、涙をふいて、いいきかせました。

子供が、いつてから、二、三日というものは、お母さんは、仕事も手につきませんでした。

「いまごろは、どうしているだろう？」と、思ったのでした。

すると、五、六日めに、ひよっこり、吉雄はもどつてきました。

「どうして、おまえ帰つてきたのだい。」と、驚いて、お母さんは、たずねました。

「上の小僧さんが、意地悪をしていられない。」と、吉雄は、訴えました。

「そんなことで、帰ってくるばかがあるか？」と、お父さんは、しかりましたが、お母さんは、そこばかりが、奉公口でないといつて、ほかをさがすことにしました。

これも、町で、きれいな店を張つている時計屋でありました。そこで、もう一人、小僧がほしそうだから、世話をしましようにといつてくれた人がありました。

「ほんとうに、時計屋なんかも、いい商売だね。」と、お母さんは、喜びました。

吉雄は、その人につれられて、時計屋へゆくことになりました。

「またつとまらんといつて、帰ってくるようなことがあつては、近所に対して、みつと

もないから、たいていのことは、我慢がまんをするのだよ。」と、お母かあさんはいいきかせました。吉雄よしおは、うなずいて、出でていきました。やはり、二、三日にちは、お母かあさんは、子供こどものことを案あんじて、仕事しごとが手てにつきませんでした。

「つらくても、我慢がまんをしているのでないかしらん？ あんなことをいうのではなかった……。」と、思おもいわずらっていますと、

「僕ぼく、帰かえってきた……。」と、入いり口ぐちでした声こえは、たしかに、自分じぶんの子この声こえでありました。母親ははおやは、またかと驚おどろいて、飛とび出だしました。

「どうしたんだ？ 吉雄よしお……。」と、お母かあさんは、思おもわず、我わが子この顔かおをにらみました。よくきくと、時計屋とけいやのお婆おばあさんは、病びょうき気で臥ねていたのでした。吉雄よしおは、その看かんびよ病うのてつだいをさせられるのがいやさに、出でてきたというのであります。

「もう、お年としよりで臥ねていられるのだから、そんなこと、なんでもないじゃないか。」と、お母かあさんは、ひたすら、吉雄よしおが、勤つとめのいやさから出でてきたと信しんじて、しかりました。

「僕は、たんつぽのそうじなんか、させられるのはいやだ！」と、吉雄よしおが、いいますと、お父とうさんは、これを聞きいて、

「子供こどもに、そんなことをさせるのは、先方せんぽうがよくない。いやがるのは、もつともだ。」

と、こんどは、お父さんが、吉雄に味方されたのでした。

吉雄は、家に帰ると、いつも川のほとりにゆきました。川は、村はずれの丘のふもとを流れていました。草の上に足を投げ出して、あちらの空をながめるのが大好きでした。彼はかつて、ここの景色を絵に描いて、学校で先生にほめられ、その絵は、張り出しになりました。また、ここを文章で書いて、甲をもらいました。

その日も、ここへやってくると、川の水はゆるく流れて、空をゆく、白い雲の影を、ゆつたりとした水面にうつしていました。

「釣りにくれば、よかつたな。」と、思っていますと、丘の上で、ちょうど自分ぐらいの少年がくわをふり上げて、土を耕し、なにか植えていました。

「僕も、町へなんかゆかずに、ああして働いたら、どんなにいいだろう……。」と、思っている、その少年がうらやまれたのであります。彼は、少年のそばへゆきました。そして、二人は、じきに仲好しになつてしまいました。

その少年は、りんごの木を植えていたのです。体が弱いので、小学校を卒業すると、自分は果樹園を営むことにしたのです。それで、自分一人ではさびしいから、

「君もお父さんや、お母さんが許されたら、ここへこないか。二人でいろいろなものを栽

「培いばいして、愉快ゆかいに生活せいかつしようよ。」と、少年しょうねんはいったのでした。

「僕ぼくは、きつと許ゆるしてもらうよ。」

吉雄よしおは少年しょうねんと誓ちかいました。そして家いえに帰かえつて、熱心ねっしんに頼たのんで、許ゆるしてもらったのです。

いま、この村むらで二人ふたりの少年しょうねんが、経営けいえいしている果樹園かじゆえんを知らぬものはありません。春はるのうららかな日ひに、ここを訪ねると、川かわべりには、紫むらさきの星ほしのようなヒヤシンスが、一面めんにいい香りかおを放はなっています。また、真まつ赤かなチューリップが、金色きんいろに日ひの光ひかりにかがやいています。

そのほか、いちごの畑はたけがあり、夏なつにかけて、丘おかのスロープには、大粒おおつぶなぶどうのふさが、みごとに実みのるのでした。

二人ふたりの少年園芸家しょうねんえんげいかの、うわさが世間せけんに広ひろまるたびに、吉雄よしおのお母さんかあは、喜よろこんで鼻はなを高くたかしたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 8」講談社

1977（昭和52）年6月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第6刷発行

底本の親本：「青空の下の原っぱ」六文館

1932（昭和7）年3月

初出：「国民新聞」

1931（昭和6）年3月1日

※表題は底本では、「子供《こども》はばかでなかった」となっています。

※初出時の表題は「子供は馬鹿でなかった」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：津村田悟

2020年3月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

子供はばかでなかった

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>